

第十八課

だれの肖像ですか

人間の運命に調和する祈り

「そこで彼らに言われた。『これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。』」

（マタイ二二・二〇）
「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。……』と仰せられた。」

（創世一・二六）

「これは、だれの肖像ですか。」こう問いかけることによって、主イエスは、自分を陥れようとした敵を撃退し、税に関する問題を解決なさいました。その質問と、そこに含まれている原則は、一般のものにも適用しますが、人間自身に適用する時、最もふさわしいものです。その人の肖像がその人の運命を定めます。神の肖像（かたち）を持つ者は、神に属する者です。神への祈りは、その人が創造された目的から当然生じるものです。祈りは、その人の持つ、神を起源とするすばらしいかたちの一部です。三位一体の神が持つておられる愛の交わりの奥義を思うと、祈

りこそ、地上におけるその交わりのかたちであり、似姿なのです。

祈りが何であるかを瞑想し、祈りが神に対して持つ力を瞑想すればするほど、神はどうして人間のような者にそのみこころをとめられるかと問わないわけにいかなくなります。罪が人間を墮落させてしまったので、今の人間から神が意図されたような人間像を描き出せなくなっています。そこで、神が人間を創造された時の記録にもどり、そこから神の目的を見出し、その目的を成就するために人間に託された力がどのようなものであるかをさぐり出さなければなりません。

人間に対する神のみこころは、神の言われたことばから明らかです。人間は、地に満ち、地を従わせ、支配すべきでした。この三つの表現は、人間が神の代理人としてこの地を治めるべき者であることを明らかにしています。神の代理人として神の代りをすべき者でした。自ら神に従い、すべてのものを神に従わせるべきでした。地上でなされることは、すべて人間を通して行われるべきだというのが神のみこころだったのです。地上の歴史は、完全に人間の手中にあるべきでした。

そのようなみこころとともに、人間には、占めるべき地位と、思いのままにできる力も備えられていました。この世の支配者が遠い所にある領土に代理人を送る時には、その代理人が政策を傳達することや、それを実行に移すことは承認すみのことです。代理人は、政策を実行し、国の威信を保つため、軍隊やその他の必要な手段を行使することができます。その政策が承認されな

いは、支配者の意図をもっとよく理解する者に道をゆずらなければなりません。しかし、支配者の信頼のある間は、通達を実行してもよいのです。人間は、神の代理人として支配すべきでした。万物は人間の意志と支配に服すべきでした。人間の通達に対し、人間の求めに応じて、天は地上に祝福をくだすことになっていました。人間の祈りは、単純であつてもすばらしく、最も自然な手段となるはずだったので。この祈りについて、天の王と、この地の主人である、王の忠実なしもべの人間との間の交わりが保たれるはずでした。世界の運命は、人間の願いと意志と祈りの力にゆだねられていました。

罪とともに、すべてが恐ろしく變つてしまいました。人間の墮落は、全被造物をのろいのもとに追いやつてしまつたのです。しかし、贖いによつて回復のきざしが見え始めました。神は、アブラハムのうちに、御自身のために民を形成し始められました。その民の中から王たちが現れ、そしてついに偉大な王が現れることになりました。神の忠実なしもべの祈りには、みもとに来る者の運命を決する力が与えられました。アブラハムを見ると、彼の祈りは、ただ祝福を獲得するだけではなく、人間の運命と、人間を支配する神のみにころに影響を及ぼす君主の大権を実行するものでした。アブラハムが自分のために祈っている姿はどこにもありません。ソドムとロト、アビメレク、イシユマエルなどのための彼の祈りは、神の友である人物が、自分の周囲の人々の歴史をつくる力を持つことを証明しています。

これが最初からの人間の使命でした。聖書はこのことを告げるだけではなく、神が人間を信頼して、そのように崇高な使命をお与えになったことをも教えています。それは、神が人間を神のかたち、神の似姿にお造りになったからです。内的な適合性を無視して、外的な支配だけをおゆだねになったものではありません。支配権を持ち、万物の主となるという神のかたちは、人間の性質のうちに宿る内的な似姿に根ざしています。神と人間との間には、内的合意と調和、神のかたちの前兆があり、それが、人間を神と世界との仲保者に真にふさわしい者とします。人間は、預言者、祭司、また王となって、神のみところを解き明かし、万物を代表してその必要を神に訴え、そして、神の恵みをいただいて、それを分配することになっていたはずです。人間が神に代って支配できるのは、人間が神のかたちを担っているからです。人間は確かに神に似ており、神のみむねをさぐり、神の御計画を實行することができました。そのゆえに、神は、人間に、世が必要としているものを求めてそれを獲得する特権をお与えになりました。罪がしばらくの間神の計画をくじいてしまいましたが、祈りは、人間の墮落前の姿をとどめているものです。すなわち、祈りは、人間が神に似た存在であることの証拠、無限なる見えざるお方との交わりの手段、宇宙の運命を握るお方の御手を動かす力なのです。祈りは、単に、あわれみを求めて叫ぶことではありません。祈りは、自分が神に造られた者であり、王のような自由をもって、永遠なるお方のみこころの執行者として創造された者であり、また、そうなり得る者であることを知って、自

分の意志を最高に表現することなのです。

罪が破壊したものを恵みは回復しました。第一のアダムが失ったものを第二のアダムが取りもどしました。このキリストにあって、人間は当初の地位を回復し、教会はキリストのうちにとどまることによって、「求めなさい。そうすれば与えられます」という約束を受け継ぎます。この約束は、初めは自分だけが必要とした恵みや祝福に関するものではありませんでした。天のぶどうの木の実を豊かに結ぶ枝として、御父のみわざと栄光のために生きる者としての地位に関するものでした。その祈りは、キリストのうちにとどまり、自分を捨てて、キリストの従順と自己放棄の道を歩み、自分のいのちを失ったけれどキリストのうちにいのちを見出し、今は、御父と御国の益を完全に求める者のものです。このような祈りをする人は、新創造が自分たちを当初の使命にまで引きもどし、神のかたちと似姿とともに、支配の力をも回復してくださったことを理解している者です。そのような人は、自分たちの群の中で、天の力を獲得し、分配する力を持っています。聖なる大胆さをもって、自分たちの意志を知らせ、神の御前に祭司^{注1}として生き、王として、来るべき御国の力が、自分たちの思うままになります。^{注2}この人は、「求めなさい。そうすれば与えられます」という約束を勝ち取る者です。

生きている神の教会よ。あなたの召命は、あなたが知っているよりもっと崇高で、聖いものです。神は、神の祭司、また王としての教会員を通して世を治めたいと願っておられます。彼ら

の祈りが、天からの祝福をもたらすからです。御父は、自分が救われたことだけに満足せず、自分を全くささげる選ばれた者のうちに働き、彼らを通して、御自身の輝かしいみこころを成就されます。また神は、夜昼神に叫び求めるこれらの選ばれた人々によって、人間の当初の使命がいかにすばらしいものであるかを証明してください。この世で神のかたちを担う者としての人間の手に、この世は確かにゆだねられました。人間が墮落した時、人間といっしょに万物が墮落し、全被造物はうめき苦しんでいます。しかし、人間は贖われました。そして当初の威信の回復が始まりました。神の永遠の目的と御国の到来は、喜んでキリストにとどまり、キリストを自分のかしら、偉大なる王である祭司として迎え、祈りにおいて、自分の願うことは神が答えてくださると大胆に宣言する神の民に依存しています。これが神のみこころです。神のかたちを担う者、地上における神の代理人として、贖われた人間は、祈りによってこの世の歴史を決定しなければなりません。人間は、祈るために、また、祈りによってこの世を支配するために創造され、今また贖い出されたのです。

主よ。あなたがみこころにとめられる人間とは、いったい何者なのでしょう。あなたが願われる人の子とは、いったい何者なのでしょう。あなたは、人を御使いたちよりもやや低くし、

これに栄光と誉れの冠をおかぶせになりました。あなたは、御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を人の足の下に置かれました。主よ、私たちの主よ。あなたの御名は全地にわたって、なんと崇高なものでしょう。

主なる神よ。罪は人間をなんという深みにまで沈めてしまったことでしょう。そして罪は、なんと人間の心を暗くしてしまったことでしょう。人間は、あなたのしもべ、あなたの代理人となるという神に与えられた使命さえも知らないのです。ああ、あなたの民には、目覚めた時に、自分の使命を受け入れ、人々を祝福するために、神と人に対する力を求める用意すらありません。

主イエスよ。あなたにあって、御父は、ふたたび人間に栄光と誉れの冠をかぶらせ、神がお望みになる者になる道を開いてくださいました。ああ、主よ。あなたの民をあわれみ、あなたの民を訪れてください。あなたの教会の中で力強く働き、信じる弟子たちに、祭司としての務めに励むように教えてください。あなたは、あなたの御国に仕え、国々を治め、地に神の御名を輝かすために、すばらしい約束を祈りにお与えくださいました。アーメン。

注
1

祭司は、天と地を結ぶために定められた環、罪人と神との交わりの仲介者です。このような祭司職は、罪

の赦しに関しては、神の御子の御手にのみあります。しかし、創造者と被造物との間のコミュニケーションの媒介という点では、贖われた人々、すなわち神の教会の手にもあります。

「神は王を求めておいでになる。天使たちの中からではない。墮落した人間が、宇宙の支配者として神の用に立たなければならない。人間の手が王権を握り、人間の頭が王冠をかぶらなければならない」〔裂けた垂れ幕』H・ボナー〕。

注²

神は、人々の中に祭司を捜し求めておられます。人間の祭司は、神の永遠の御計画の中で欠かせないものの一つです。被造物が人間によって治められることは、神の御計画です。被造物の礼拝が人間の手で実行されることは、それにもまして神の御計画です。